

# 桑門秀我『選擇本願念佛集講義』現代語訳注―「大意」並びに「第七章」―

上 野 忠 昭

## 【抄録】

明治期を代表する浄土宗学者桑門秀我が法然『選択本願念佛集』を解説した『選擇本願念佛集講義』は、浄土宗鎮西流白旗派に伝承された理解を意識して書かれており、浄土宗の中での『選択集』解釈の筋道を知ることができる。本稿では、本書の概要を示した冒頭「大意」の部分と第七章の現代語訳及び注を提示する。入門書と歌われているが、理解するには高い仏教の素養を求められ、現代語訳注を付して、より身近な資料とすることを目的とするものである。

キーワード…桑門秀我 選擇本願念佛集講義 選擇本願念佛集

## 一 はじめに

桑門秀我<sup>①</sup>（一八五九―一九三九）が、明治二十六年（一八九三）に

著した『選擇本願念佛集講義』四卷（以下『講義』<sup>②</sup>）は、その題名が示すとおり、法然撰述の『選擇本願念佛集』（以下『選択集』）の解説書である。佛教大学法然仏教学研究センターの第一部門法然文献班内第二班（通称桑門班）では、この『講義』の現代語訳作業を進めている<sup>③</sup>。

『講義』撰述について、著者である桑門秀我自身が冒頭の「大意」（次章に本文とともに現代語訳・注釈を示す）で、

予が今講述する所は専ら『徹選擇』『決疑鈔』及『直牒』に據り、宗意の精要を陳ぶるに至ては、廣く報夢五十餘帖の定判を守り、傍ら古賢先哲の指南に従ひ、往々愚見を加へ、偏に初學に便するのみ。且つ異論多岐に渉るが如きは務めて其正義を擧げ、以て迷ひ無からんことを庶幾す。

と述べているように、宗祖法然から二祖弁長・三祖良忠が受け継ぎ、更に七祖聖岡に伝えられた解釈によって書かれた浄土宗鎮西流白旗派としての講説書である。桑門は解釈にあたって、しばしば「相伝の

義」「白旗正流」「白旗正義」等の語を用いているが、このことから、白旗派の伝統教学を強く意識していることがわかる。本書第一の特色である。桑門は『講義』撰述の後、主として浄土宗教校第三学年の教科書に適することを目的として、一九一一年に『選擇集大意』を著した。その凡例において次のように記している。

明治二十六年書肆の需に應じ、初學の資に供せんが爲に選擇集講義を編述せしも、啻だに本文の字句を解するに力め章節段落の大意を領得するに便ならず、初學に益するもの幾んど希なるのみならず、巻帙稍々多きに失して徒らに披閱に勞かれ、其勞多くして功少なきを憾むや久し。偶々阪府一心寺主前田僧正の囑に依り本書を呷するに至れるは余の光榮復た之に過ぎず。

『選擇集大意』は『講義』から『選択集』本文の字句解説を省いて、各章の大意をまとめたものである。一九一一年は、桑門が宗教大学教授に任ぜられた年であり、浄土宗門教育機関である宗教大学の講義に使われたと思われる。このことから、『選擇集大意』の内容、すなわち『講義』の内容は、宗乗のスタンダードとして当時認められていたと考えられる。そして、両書とも「初學」対象を意図して編まれたものであることは、桑門が浄土宗僧侶を目指す者に求めていた教学の素養のスタンダードがいかに高かったかを窺い知ることができる。解説は、伝統の中で積み上げられた議論に基づいており、伝承ということを変更して見なおす資料となり得る。現代語訳にあたって、求められているレベルの高さを痛感し戸惑いを覚えながらも、『選擇集』に対する浄土宗の伝統的な解釈を再確認し紹介するためと臆を固めて作業を

進めている。

本稿は、『選擇集』及び本『講義』の概要を示す冒頭の「大要」の部分と「第七章光明撰取」の『講義』本文と現代語訳・注を、本研究班の最初の報告として提示するものである。<sup>(4)</sup>

『法然仏教学研究センター紀要』創刊号で報告されているとおり、桑門班班長本庄良文研究員と上野が訳注作業にあたり、第一章（序文を含む）、第三章、第四章、第五章、第六章、第十三章、第十四章、第十五章、第十六章を本庄、第二章、第七章、第八章、第九章、第十章、第十一章、第十二章を上野が分担することとした。そのうち、第一章（序文を含む）は、注でも触れているように佛教大学大学院の浄土教学演習で本庄研究員指導の下に二十八丁左四行目まで講読された。その成果を反映して、今回は上野が序文に相当する「大意」をまとめた。

現在、この分担計画に基づき（第一章、第十六章は二人による共訳）、一通りの下訳は完了している。今後、お互いにチェックしながら、それぞれの分担部分を発表していく予定である。

#### 凡例

①現代語訳にあたり、各章とも上下二段とし、上段に『講義』本文、下段に現代語訳を記した。注は各章ごとに末尾に付した。現代語訳と注において、漢字は主に新字体を用いた。『講義』中の『選擇集』本文は段抜きで記した。

②『選擇集』本文については、適宜句読点を入れる。

③カタカナはひらがなに直し、適宜句読点を付けた。

④『講義』内の漢字は旧字体とした。

⑤送り仮名の不足は「(め)」「(ふ)」等のように補った。

⑥不読の文字、現代かなづかいで用いられない助詞等は「の(之)」「か(乎)」「を(於)」のように( )で補った。再讀文字は「未だ」

とせず(未・再読)とした。

⑦難読の文字は適宜「纔(わづか)」に「加之(しかのみならず)」と訓を加えた。

⑧文献名は『』で囲んだ。

⑨なるべく引用や説明される語句に「」を付け、引用中の括弧は、《》とした。また、本文中にある( )は《》に置き換えている。

⑩割注の小文字はへで囲んだ。

⑪本文中、丁数を(四三右)(一六左)のように入れた。

⑫訳文中、訳者が補った部分は「」で囲った。

⑬訳をどこした語の中で、術語として本文中で用いられた形を示した方が理解しやすいと思われる場合には( )で囲んで補った。

⑭「問曰」「答曰」等の問答には、訳文において【問】【答】のような記号を挿入した。

⑮講義の科文と注釈の簡条に○印が付されている。科文には◎、注釈の簡条には○にした。

## 註

(1) 桑門秀我 一八五九〜一九三九(安政六〜昭和十四)。号は明蓮社

鑑誓欲如実阿。黒田真洞に師事して、唯識および宗乗を究める。愛知支校教授 同校長専門学院宗乗部教授、宗教大学教授を歴任。また、一九一八年、浄土宗執綱となり、以来四年間宗政にも関与した。それより前、〇二年神門寺にすすみ、執綱辞任後はもっぱら自坊を中心に地方文化の交流と教化に専念した。著書は『選択集講義』、『浄土宗大意』、『浄土宗義講要』、『選択大意』、『四帖疏大意』、『出雲宗要』がある。『浄土宗大辞典』、『桑門勸学略年譜』(『浄土学』一五)。大橋俊雄『近代浄土宗僧英伝』(『浄土』一九六三年五月号)参照。

(2) 本書は、国立国会図書館近代デジタルライブラリーに以下の通り四巻すべて公開されている。

① 選択本願念仏集講義 上 図書 桑門秀我 著 越智専明 校(大村屋総兵衛 1893) <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/822052>

② 選択本願念仏集講義 中 図書 桑門秀我 著 越智専明 校(大村屋総兵衛 1893) <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/822053>

③ 選択本願念仏集講義 下 本 図書 桑門秀我 著 越智専明 校(大村屋総兵衛 1893) <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/822053>

④ 選択本願念仏集講義 下 末 図書 桑門秀我 著 越智専明 校(大村屋総兵衛 1893) <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/822055>

(3) 『法然仏教学研究センター紀要』創刊号の桑門班の班長である本庄良文研究員による本書の概観および作業の概要についての報告(一一三・一一四頁)を参照されたい。

(4) 本号において、本稿と同時に本庄良文研究員が第十三章の現代語訳注を発表されている。

『選擇本願念仏集講義』は、平成17〜21年度の5ヶ年にわたり佛教大学大学院の授業(浄土教学演習…本庄良文研究員担当)において、巻上の初めから同二十九丁右四行目までを講読された。参加の大学院

生の諸氏は、担当箇所において引用文献の出典および語義を調査し、現代語訳を試みられ、本稿を書くに当たりその成果を参考とさせていただいた。ここに、諸氏の尊名を担当箇所順に記して感謝の意を表する。

伊藤瑛梨氏、勝部隆満氏、大田明光氏、三宅俊明氏、長谷川浩亨氏、永田真隆氏、伊藤康道氏、服部照道氏、加藤弘孝氏、神田眞雄氏、高津晴生氏、中澤良宣氏、大津憲優氏、神田眞照氏、林巧萍氏、奥山誓

氏、清原大智氏、富川禎顕氏、浅野真義氏、岩谷隆法氏、武田真享氏、館和典氏、渡憲哉氏、無量秀弥氏。  
また、平成十八・十九年には本書のテキストデータ化を計画し、桑門班本庄良文班長及び上野のほか、兼岩和広氏、角野玄樹氏とともに作業を進め、協力諸氏の集中作業によってまたたくまに完了した。本稿は、この作業に依るところが大きく、協力いただいた諸氏に改めて謝意を表したい。

## 二 大意

### 【講義】

越智専明師校閲

桑門秀我師講述

選擇本願念佛集講義 全四冊

諸宗佛書店 大村屋宇田總兵衛

鴻盟社今村金次郎 梓

### (一右)

選擇本願念佛集講義

越智専明師校閲

桑門秀我師講述

將に此〔の〕集を講ぜんとするに、聖徳太子の指南に従ひ、三門を以て分別すべし。一には大意、二には釋名、三には入文解釋なり。

○第一大意 此〔の〕中、分つて八段とす。

(一) 緣起 『勅傳』十一に云〔く〕、「建久八年、上人い

越智専明師校閲

桑門秀我師講述

選擇本願念佛集講義 全四冊

諸宗佛書店 大村屋宇田總兵衛

鴻盟社今村金次郎 梓<sup>①</sup>

選擇本願念佛集講義

越智専明師校閲

桑門秀我師講述

これから『選擇本願念佛集』を講義するにあたり、聖徳太子の方法に従つて、三門に分けて〔解釈〕しよう。〔三門とは〕第一には大意（おおよその内容）、第二には釈名（題名の解釈）、第三には入文解釈（各文の解釈）〔の三つ〕である。

○第一 大意（おおよその内容）これを分けて八段とする。

(一) 『選擇本願念佛集』撰述の由来

ささかなやみたまふことあり。殿下《月輪》ふかく御なげきありける程に、いくほどもなくて平癒したまひにけり。

上人、おなじき九年《上人六十六歳》正月一日より草庵にとどこもりて別請におもむきたまはざりければ、藤右衛門尉重經を御使として《浄土の法門（一左）年來教誡を承るといへども、心腑におさめがたく要文をしるし給はりて、且は面談になぞらへ、且は後の御かたみにもそなへ侍らん》と仰《せ》られければ、安樂房《外記入道師秀子》を執筆として選擇集を選せられけるに、第三章の章、書寫のとき《予若《し》筆作の器にたらずば、かくのごとくの會座に參ぜざらまし》と申《し》けるを聞《き》給ひて、この僧、驕慢の心ふかくして惡道に墮しなんとてこれをしりぞけられにけり。其《の》後は眞觀房感西にぞ書《か》せられける。」

因《み》に悉に始終の執筆を明さば、『牒』七《七七左》、或が云ふ。此《の》選擇集には多《く》の執筆有り。謂く、「選擇集」よ《自》り「念佛爲先」の註に至《る》まで上人の御自筆なり《也》。第一篇より、第三本願章の「能令瓦礫變成金」《本《廿五右》》に至《る》まで安樂房の執筆也。「問曰一切菩薩雖立本願」より十二付屬章に至《る》まで眞觀房の執筆なり《也》。第十三章より第十六章の「私云」の「一如經法應知」までは《二右》《末《三十八右》》他筆なり《也》。名字を失す。「靜以善導」以下は又

『法然上人行狀画図（以下『四十八卷伝』と呼ぶ）』卷十一に云う。「建久八年、上人はいささか体調を崩された。九条兼実殿下《月輪》は深く悲しまれていたところが、まもなく快復された。上人は、翌建久九年《上人六十六歳》正月一日より草庵に籠もつて、特別な招きにも出向かわれることはなかったので、藤原右衛門尉重經を使者として《浄土の法門》について何年も教えを承ってきましたが、心に納めきれないところがあります。經論の重要な文をお書きとめいただいて、一つには《それを読むことによつて》直接お目にかかつて教えを頂くの代わりとし、また一つには《上人が亡くなられた》後の形見にさせてほしい》と仰つたので、安樂房遵西《外記入道師秀の子》を書き役として『選擇集』を撰述されたところ、第三章を書写していたとき《私にもし文筆の才能がなかったならば、このような場に参加してはいないだろう》と話すのを聞きになって、この僧は、おごり高ぶる心が深く、きつと惡道に墮ちるだろうとお思ひになって、安樂房を書き役からはずされた。その後は眞觀房感西に書かせられた。」

ちなみに、最初から最後まで書き役について詳細を明らかにすると、『直牒』七《七七左》には、「或る人が次のように云っている。この選擇集には多くの書き役がいる。つまり、「選擇集」より「念佛爲先」の註に至るまでは、法然上人の御自筆である。第一篇より、第三本願章の「能令瓦礫變成金」《本《廿五右》》に至るまでは、安樂房が書き役を務めた。「問曰一切菩薩雖立本願」より十二付屬章に至るまでは眞觀房が書き役を務めた。第十三章より第十六章の「私云」の「一如經法應知」までは《末《三十八右》》他の書き役である。名はわからない。「靜以善導」以下はまた眞觀房が書き役を務めた。」



眞觀房の執筆なり（也）。

（二）奇瑞 勅傳十一に云（く）、「此（の）書を選進せられて後、同年（建久九年）五月一日、上人の夢の中に善導和尚來應して「汝專修念佛を弘通せるゆえに殊更に來れるなり」としめしたまふ。此（の）書、冥慮にかなへることしりぬべし。ふかく信受するにたれり。」

（三）相傳 勅傳四十六〈初右〉「鎮西の聖光房辨長へ又辨阿と號す」建久八年吉水の禪室に參ず。時に上人六十五辨阿三十六なり。翌年建久九年の春上人選擇集を聖光房にさづけらる。《これ月輪殿の仰（せ）によりてえらべる所なり。いまだ披露に及ばずといへども汝は法器なり。傳持にたへたり。はやく此（の）書をうつして末代にひろむべし》と仰（せ）られればかたじけなく頂戴してうけぬ。我（が）大師釋尊はただ法然上人なりとぞたとひ申されける《節略》。然（二左）るに『牒』一〈廿七〉及び大澤見聞等に依るに、建久八年鎮西上人歸國して普く道俗を勧め念佛を弘通し一年を隔てて正治元年《建久十年改元》再び上京して此（の）書を相傳すと云（ふ）。是れ傳の異説にして『決疑鈔』の終と相違せり。須く勅傳に依るべし。また建久九年より七年後、元久元年三月十四日、小松殿に於

（二）『選択集』撰述における奇瑞

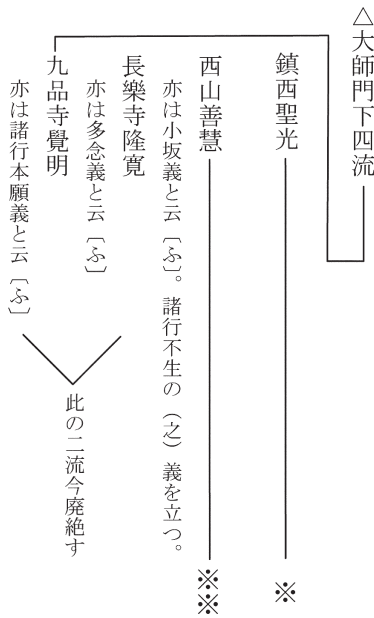
『法然上人行狀画図』卷十一に次のように云う。「此の書〔『選択集』〕を撰述し進呈された後、同年（建久九年）五月一日、上人の夢の中に善導和尚が來現されて《あなたは專修念佛を弘めているので、特別にやって來たのである》と告げられた。〔このことから〕『選択集』は、善導大師の計り知れないおぼしめしに適っていることがわかるのである。深く信じ受けとめるべき価値のある書である。」<sup>6</sup>

（三）相傳

『四十八巻伝』卷四十六〈初右〉に「鎮西の聖光房弁長へまた弁阿とも号する」<sup>7</sup>が（中略）建久八年（一一九八）吉水の法然上人の禪室に參上した。その時、法然上人は六十五歳、弁阿は三十六歳であった。（中略）翌年建久九年（一一九九）の春、上人は選擇集を聖光房（弁阿）に授けられた。《これは月輪殿（九条兼実公）の仰せによつて撰述した書である。まだ表に出すには至っていないが、あなたはこの書に書いてある教えを過たず受け取る十分な力量を具えている。相伝し護持するにふさわしい。はやくこの書を写して後の世に広めなさい》と仰つたので、ありがたく頂戴して受け取られた。《私にとつての大師釋尊は、ただ法然上人のことである》と、尊んで申された。<sup>8</sup>（適宜省略している）（とある。）ところが『決疑鈔直牒』一〈廿七〉<sup>9</sup>及び『大沢見聞』<sup>10</sup>等に依ると、建久八年に鎮西上人は帰國して、広く僧侶・在俗の人々に念仏を勧めて、一年の後、正治元年《建久十年に改元》（一一九九）再び上京してこの書を相伝したと云う。これは伝記の異説であり『決疑鈔』の末尾に書かれていることに反している。当然『四

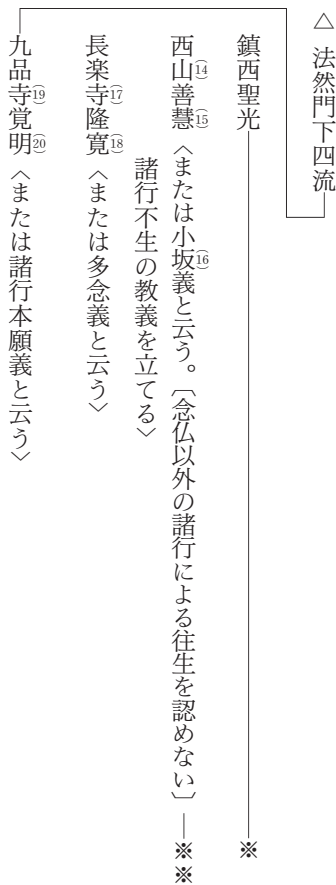
て隆寛律師に授け玉へり。其〔の〕御詞に云〔く〕《勅傳四十四》、「はやく書寫して披見すべし。もし不審あらばたづね問べきなり。源空存生のあひだは秘して他見に及べからず。死後の流行は何事かあらんや〈云云〉」と。又勢觀房へも授けたまふこと、『語燈錄』に見へたり。其〔の〕他の流派に於ても各其〔の〕派祖に傳へたまふと唱ふれども正史に載せざる所なり。

(四) 流派 古來大師門下に四流、記主門下に六派あり。又、西山門下にも四流ありと云〔ふ〕。左に圖示す。

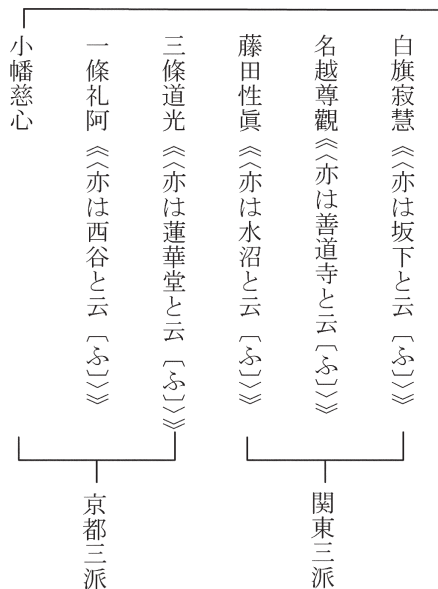


十八卷伝」に依るべきである。また建久九年より七年後、元久元年〔一二〇四〕三月十四日、小松殿において〔法然上人は〕隆寛律師に〔『選択集』を〕授られた。そのときの法然上人のお言葉に、『四十八卷伝』四十四、「はやく書寫して読みなさい。もし不審な点があれば、〔私に〕質問しなさい。〔私〕源空が生きている間は秘匿して他の人に見せてはいけない。〔私の〕死後の流行についてはどうすることができようか〈云云〉」とある。また勢觀房源智上人へも〔『選択集』を〕授れたことが、『語燈錄』に記されている。<sup>13</sup>その他の流派においても、おのおのその派祖に伝えられたと主張するが『四十八卷伝』には記載されていない。

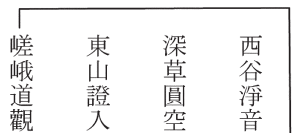
(四) 流派 古來、法然上人の門下に四つの流れがあり、三祖記主良忠上人の門下に六つの派がある。また、西山証空上人の門下にも四つの流れがあると云う。左に図示する。



※――△記主門下六派――

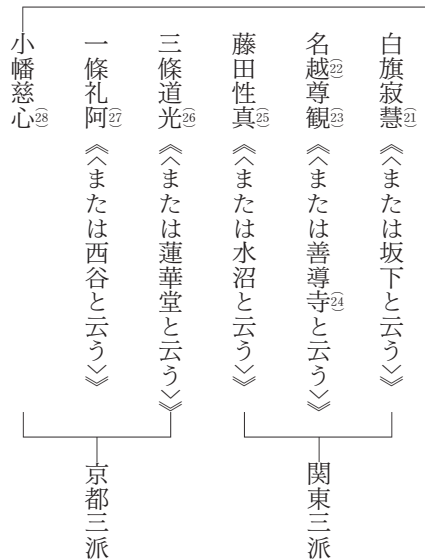


※※――△西山門下四流――

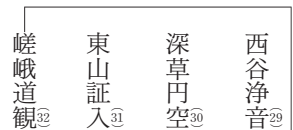


大師門下四流の略義は、中古何人の作と云(ふ)ことを  
 詳にせざれども、左の略頌あり。之に依(り)て其(の)  
 一班を知るべし。

※――△良忠門下六派――



※※――△証空門下四流――



法然上人門下四流の敎説の概要は、中古より何人の作かは詳しくはわかっていな  
 いが、左の簡略に表した詩節がある。これによってその一部分を知ることができ  
 る。



鎮西 念佛本願聖光房 諸行攝機生報土<sup>二</sup>

念佛は本願なり。諸行は非本願なり。然れども諸行も亦十九、二十攝機の願に乗じて九品の報土に生ず。

西山 諸行不生善慧房 念佛任持<sup>ニ</sup> 生<sup>ニ</sup>報土<sup>一</sup>

諸行は非本願なるがゆえに全く往生せず。然れども念佛に任持せられて報土に生ず。諸行獨立して往生せず。(三左)

長樂寺 無明斷除隆寛房 諸行邊地稱名報

往生の業、平生に成ぜず。臨終に佛力に依りて無明を斷除して往生す。但し諸行は非本願なるが故に邊地に生ず。邊地とは九品なり。又念佛は本願なるが故に九品の外の報土に生ず。

九品寺 諸行本願覺明房 勝劣二願同報土

念佛諸行、皆本願なり。謂く、第十八は念佛の願、十九、二十は諸行の願なり。但し念佛は勝れ、諸行は劣なり。勝劣異れども皆九品の報土に生ず。

此(一の)四家の外、自流の新義を立(つ)る者多し。知らんと欲せば、『浄土源流章』等を見るべし。但し覺明の一義を加へて四流とすることは古來の説《良榮十六疑問答見

鎮西 「念仏本願聖光房 諸行は攝機報土に生ず」

念仏は〔阿彌陀仏の〕本願である。諸行は本願ではない。しかしながら諸行もまた、第十九・第二十の人々をもれなく救い取る願(攝機の願)に乗じて〔『觀無量壽經』に説かれる〕九品の報土に往生する。<sup>(33)</sup>

西山 「諸行不生善慧房 念仏に任持せられて報土に生ず」

〔念仏以外の〕諸行は本願ではないので全く往生しない。しかしながら念仏に支えられて報土に生れる。諸行は単独では往生できない。

長樂寺 「無明斷除隆寛房 諸行は邊地稱名は報」

往生のための修行は平生には成就しない。臨終に阿彌陀仏の力によつて無明を斷ち切つて往生する。但し〔念仏以外の〕諸行は本願でないから浄土の片隅<sup>(34)</sup>に生まれる。その浄土の片隅とは〔『觀無量壽經』に説かれる〕九品の浄土である。また念仏は本願であるから九品とは別の報土に生まれる。

九品寺 「諸行本願覺明房 勝劣二願同〔じ〕く報土」

念仏も諸行もみな本願である。すなわち、第十八は念仏〔往生〕の願であり、十九、二十は諸行〔往生〕の願である。ただし念仏は勝れ、諸行は劣っている。勝劣の異りはあるが、すべて九品の報土に生まれる。

この四家のほかに、自分の流派として新しい教義を立てる者が多い。知りたいならば、『浄土法門源流章』<sup>(35)</sup>等を見よ。但し覺明房の諸行本願義を加えて四つの流派とすることは、古來の説《良榮『十六疑問答見聞』<sup>(37)</sup>》ではあるが、覺明房は法

聞》なれども覺明は大師滅後に出雲路の住心房に從て諸行本願の義を立てしなり《勅傳四十八》。元祖の門下にあらず。但〔し〕記主禪師は西山等の所立と同〔じ〕く彼の立義を對破したまふ故に、四流の一とせしなるべし。更に詳〔かに〕せよ。

(五) 大猷 末三十三右に云〔く〕、計みれば〔也〕夫、速〔か〕に生死を離れんと欲〔せ〕ば、二種の勝法の中には且く聖道を闇〔い〕て選〔ん〕て浄土門に入り、浄土門に入らんと欲〔せ〕ば、正雜二行の中には且く〔四右〕諸の雜行を抛〔ち〕て選〔ん〕て應〔に〕正行に歸すべ〔應・再読〕し。正行を〔於〕修せんと欲〔せ〕ば正・助二業の中には、猶を助業を〔於〕傍〔ら〕にし、選〔ん〕で應〔に〕正定を專〔ら〕にすべ〔應・再読〕し。正定の〔之〕業とは〔者〕、即〔ち〕是れ佛名を稱するなり。名を稱すれば必ず生ずることを得。佛の本願に依るが故に」と。『鈔』五〔五八〕に此〔の〕文を釋して云く、「此〔の〕十六句は集の大意なり〔也〕」と。委〔し〕くは本文に就て辨ずべし。

(六) 信毀 承安五年大師浄土門を開立し玉ふや、貴賤同じく念佛に歸し、都鄙普く教益を蒙る。而して諸宗の碩徳高僧、率〔ををむ〕ね念佛を信ぜざる無し。然るに梅尾

然上人滅後に出雲路の住心房覺瑜<sup>38</sup>の教えによつて諸行本願の教義を立てたのである《法然上人行狀画図》四十八卷》。法然上人の門下とはいえない。ただし三祖記主良忠上人は西山証空等の立てた教義と同様、覺明の立てた教義を批判されたので、四つの流派の一つとしたのであろう。更に詳しく調べよ。

(五) 大要 『選択集』の末三十三右に云う。「よくよく思案すれば、すみやかに迷いの世界である生死を離れたいと願うならば、二種のすぐれた法門の中で、まずは聖道門はさしおいて〔入ることなく〕、浄土門を選んでそれに入れ。浄土門に入ろうと願うならば、正行と雜行の二行の中で、まずはさまざまな雜行をなげうって、正行を選んでそれに歸入せよ。正行を行おうと願うならば、正定業と助業の中で、なおも助業をわきにおいて、正定業を選んでそれをひたすら行え。正定業とは、とりもなおさず阿弥陀仏の名を称えることである。名を称えれば、必ず往生できる。阿弥陀仏の本願にもとづいているからである。」と。『決疑鈔』五〔五八〕<sup>40</sup>にこの文を解釈して「この十六句は『選択集』の大意である」と云う。詳しくは本文で説明しよう。

(六) 信受と誹謗 承安五年〔一一七五〕、法然上人が浄土宗を開宗されると、身分の高い人も低い人も同じように念仏に帰依し、都も地方も余すところなく教えの利益を蒙った。

の明恵上人の如きは此〔の〕集を披閱して頗る偏執なりとし、『摧邪輪』を作〔り〕て盛〔ん〕に之を破斥せり。又、三井の公胤僧正も、『浄土決疑鈔』三巻を著して痛く之を破し、並榎の堅者定照も亦、『彈選擇』を製して此〔の〕集を難破せり。中に於て公胤僧正は、後に頗る悔悟する所あり。著はす所の『決疑鈔』を焚き、尚ほ罪障の滅せざらんことを恐れ、大師七七日の佛事に導師たらんことを懇請し、遂に廟前に詣〔で〕（四左）て誹謗の罪を懺謝せりと云〔ふ〕。是れ信毀の大略なり。案ずるに此〔の〕集に向〔つ〕て適々攻撃を試〔み〕るが如きは、偏に是れ聖道の學見に拘泥し、未だ他力難思の密意を識らざるの致す所なり。之をしも偏執と曰はずんば、孰れをか偏執と曰はん。謗法の罪、是より大なるは莫し。慎まざる可けんや。

（七）異本 此〔の〕集凡そ四本あり。一には稿本。首

章に三經の説時を論ずる者、是なり（也）。二には刪（さん）本。初め月輪禪閣に呈し、及び鎮西辨師に授くる者、是なり（也）。三には正本。漸漸に脩飾を加へ、建暦元年十一月、平基親序文を付し、翌年印行す。世に建暦本と稱する者、是なり（也）《即ち現流の本なり》。四には廣本。門人其〔の〕文を増證する者、是なり（也）。《記主の在世までは此〔の〕本傳はりしと見へたり》。而して第一・第

そして諸宗の碩徳高僧も、おおむね念仏を信じないことはなかった。ところが梶尾トガノの明恵上人はこの『選択集』を開き見て、「非常に偏つた見解である」とし、『摧邪輪』を著して『選択集』を強く批判した。また、三井の公胤僧正も、『浄土決疑鈔』三巻を著して痛烈に『選択集』を批判し、並榎（なみえ）の堅者（りつしや）定照もまた、『彈選擇』を製作して『選択集』を非難した。このうち公胤僧正は、後に大変悔い改めるところがあり、著した『決疑鈔』を焼き、それだけではなお罪障は消えないことを恐れて、法然上人の七七日の仏事に導師を勤めたいと懇請し、廟前に詣でて、誹謗の罪を懺悔し詫びたと云う。これが信受と誹謗の大略である。考えてみると、この『選択集』に向つて、時として攻撃を試みることがあるのは、偏に聖道門の学問の見解にこだわり、いまだ他力の計りがたい仏の本意を知らないことによるものである。これを偏執と云わないならば、何を偏執というのであろうか。謗法の罪で、これより大きいものはない。慎まざることができようか。

（七）異本

『選択集』には四つの異本がある。

第一には「稿本」。最初の章に浄土三部經が説かれた時を論じているものである。<sup>14</sup>  
第二には「刪本」。初め九条兼実公に献上し、二祖聖光上人に授けたものである。  
第三には「正本」。次第に修正補填を施して、建暦元年（一二二一）十一月平基親が序文を付して、翌年刊行した。一般に建暦本と呼ばれるものである。《即ち現在流布している本である》。

第四には「廣本」。門下の人によつて（『選択集』の）文を増広し明らかにしたも

四は世に流行せず。現に流布するは第二と第三となり。就(五右)中(なかんづく)第二は鎮西相傳の本にして記主亦、此(の)本に依(り)て『決疑鈔』を製したまへり。然れどもままた字句の完備せざるあり。之を正すに至(り)ては専ら第三建曆本を以て證と爲したまへり。但(し)是れ相傳を重んじて第二の本に依るのみ。是れに由(り)て古來専ら建曆本を以て依憑とす。宜なる哉、其(の)正本と稱すること。

(八) 末書 此(の)集解釋の書類、枚舉に遑あらず。中に就て其(の)最も依憑とすべき者を示さば、『徹選擇集』二卷『鎮西』。之に三箇の末書あり。『鈔』二卷『記主』、『口傳抄』二卷『西譽』、『拾遺徹』二卷『西譽』。又、『決疑鈔』五卷『記主』。之に四種の末書あり。『裏書』二卷『記主』、『見聞』五卷『白旗』、又、坂下見聞と云、『直牒』十卷『了譽』、『見聞』十卷『良榮』、世に大澤見聞と云ふ。或曰、藤田持阿の説、良榮之を増補すと。又、『大綱鈔』三卷『望西』、『選擇之傳』一卷『袋中』等數部あり。予が今講述する所は専ら(五左)『徹選擇』、『決疑鈔』及『び』『直牒』に據り、宗意の精要を陳ぶるに至(り)ては、廣く報夢五十餘帖の定判を守り、傍ら古賢先哲の指南に従ひ、往々愚見を加へ、偏に初學に便するのみ。且つ異

のである。『三祖良忠上人の在世まではこの本は伝わっていたようである。』しかし、稿本と廣本は世に広まらなかった。現に流布しているのは刪本と正本である。とりわけ『刪本』は鎮西聖光上人相傳の本であり、三祖良忠上人もまた、此本によつて『決疑鈔』を撰述された。しかしながら、ときおり字句が完備していないところがある。これを修正するときには、もつぱら正本の建曆本を根拠とされている。ただし〔三祖上人が『決疑鈔』撰述に当たつて刪本に依拠しているのは〕相傳を重んじるという意味から第二の本(刪本)に依つていただけである。このような理由で古來主として建曆本を根拠としている。建曆本を正本と呼ぶのは、誠にものごとである。

#### (八) 注釈書

こ(の)集を解釈した書物をすべて挙げる余裕はない。その中で最も拠り所とすべきものを示せば、二祖聖光上人の『徹選択本願念仏集』二卷<sup>(45)</sup>であり。これに三つの注釈書がある。『徹選択鈔』二卷<sup>(46)</sup>、『三祖良忠』、『徹選択本末口伝抄』二卷<sup>(47)</sup>、『西譽』、『教相切紙拾遺徹』二卷<sup>(48)</sup>、『西譽』である。また、三祖良忠上人の『選択伝弘決疑鈔』五卷<sup>(49)</sup>がある。これには四種の注釈書がある。『選択伝弘決疑鈔裏書』二卷<sup>(50)</sup>、『三祖良忠』、『決疑鈔見聞』五卷<sup>(51)</sup>、『白旗(見聞)』、または、坂下見聞と云う、『決疑鈔直牒』十卷<sup>(52)</sup>、『了譽聖問』、『選択決疑鈔見聞』十卷<sup>(53)</sup>、『良榮』、一般に大沢見聞と呼ばれる。或いは、藤田持阿の説を、良榮が増補したとされている。ある。また、『選択大綱鈔』三卷<sup>(54)</sup>、『望西楼道光』、『選択之伝』一卷<sup>(55)</sup>、『袋中』等數部がある。私がこれから講述する所はもつぱら『徹選択集』、『選択伝弘決疑鈔』及び『決疑鈔直牒』に依り、宗意の精要を述べるに際しては、廣く三祖良忠上人の判定(報夢五十餘帖の定判)を守り、傍ら古賢先哲の指南に従つて、ときおり

論多岐に渉るが如きは務めて其〔の〕正義を挙げ、以て迷ひ無からんことを庶幾す。(六右)

愚見を加え、ひたすら初学の者に役立ててもらえることにのみ心掛けた。また異論が多岐に渉るときには、できるだけ、その正義を挙げるよう努めたので、〔読者が〕迷うことのないように願うものである。

## 註

(1) 本書は再版されており、複数の版が存在する。

「全四冊」を「全三冊」、「諸宗佛書店」を「浄土宗御用所」、「東京市京橋區南傳馬町壱丁目」の住所が挿入されている、「大村屋宇田總兵衛」の下に「版」を付する、「鴻盟社今村金次郎 梓」を削除する版がそれぞれある。

(2) 經を三段に分ける分け方。經の大意・題名の意味・文意の解釈の三つ。聖徳太子作と伝えられる『三經義疏』は、いずれも經を三段に分けて解釈している。ただし、この三段は序説・正説・流通である。

(3) 「心腑におさめがたし」…『講義』原本は「心腑におさめがたく」。

『浄土宗聖典』では、「心符におさめかたし」。

(4) 『法然上人行状画図』（『浄土宗聖典』第六卷一二二頁）

(5) 聖阿『決疑鈔直牒』（『浄全』第七卷五四七頁上）

(6) 『法然上人行状画図』（『浄土宗聖典』第六卷一二二頁）

(7) 浄土宗二祖（一一六二～一二三八）

(8) 『法然上人行状画図』（『浄土宗聖典』第六卷七二三頁）

(9) 聖阿『決疑鈔直牒』（『浄全』第七卷四五八頁上）

(10) 持阿『選択決疑鈔見聞』（『浄全』七卷六四四頁下）

(11) 良忠『選択伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷三四七頁）

(12) 『法然上人行状画図』（『浄土宗聖典』第六卷六七二頁）

(13) 了恵『拾遺漢語燈録』所収・源智『浄土隨聞記』（『浄全』第九卷四六二頁下）

(14) 西山流…法然上人門下四流の一つ。法然の門弟善慧房証空を流祖と

する。小坂義、弘願義ともいわれた。

(15) 善慧…証空 一一七七～一二四七（治承一～宝治一）。善慧房。西山派の開祖。

(16) 小坂…京都市東山区綾小路東端。西山派証空が、この地に住して教えをひろめた。

(17) 長樂寺…京都市東山区八坂鳥居前東入円山町。黄台山（もと東山）時宗。最澄の開創、もと延暦寺の別院、その地が唐の長樂精舎に似ているので長樂寺と呼ばれるようになった。

(18) 隆寛…一一四八～一二二七（久安四～安貞一）長樂寺流の祖。多念義を唱えた。

(19) 京都市南区東九条上御霊町（山城国紀伊郡）。来迎山。もと成菩提院と称し鳥羽上皇の勅願寺。一四七〇年（文明二）現地に移転。九品寺流（諸行本願義）派祖長西が住するにおよび九品寺と改称。

(20) 覚明…長西 一一八四～一二六六（元暦一～文永三）覺明房という。九品寺流祖。諸行本願義を唱えた。

(21) 良暁（一二五一～一三二八（建長三～嘉暦三））

(22) 名越流…三祖良忠門下六派のひとつ。山崎専称寺（福島県いわき市）を中心とし、白旗派と対抗して、東北地方に発展した鎮西派の一派。普通は名越派といい、善導寺義ともいう。派祖は尊観。

(23) 尊観…一二三九～一三二六（延応一～正和五）字は良弁。名越派派祖。良忠の教えをついで浄土宗をひろめ、東北地方における浄土宗発展の基礎を築いた。

(24) 善導寺…『講義』原本は「善道寺」となっている。「善導寺」に改



める。

- (25) 性真・性心 十三世紀後半の人。生没不明。性真ともいう。良忠門下の高足で藤田派の祖。
- (26) 道光(一二四三〜一三三〇)(寛元一〜元徳二)字は了慧・望西楼・蓮華堂。諡号は広済和尚という。三条派の派祖。
- (27) 礼阿・然空 一二九七(〜永仁五)。一条派の祖。十三世紀末、浄土教の混乱していた京都に鎮西流を定着させ、発展への下地をつくった人。礼阿・法光明院ともいう。
- (28) 慈心・良空 一二九七(〜永仁五)。生国・出自は不明。慈心という。木幡派の派祖。
- (29) 浄音は洛西仁和寺西谷に住して西谷流を開いた。
- (30) 立信(円空)は洛南深草の真宗院に住して、深草流を開いた。
- (31) 観鏡(証入)は京都東山宮辻子阿弥陀院に住して東山流を開いた。
- (32) 証慧(道観)は嵯峨浄金剛院に住して、嵯峨流を開いた。
- (33) 良忠『選択伝弘決疑鈔』二「諸行機乗攝機願成業往生」『浄全』第七卷三四頁
- (34) 辺地往生…仏智を疑うために浄土の仏前に往生できないで、長い間仏を見、法を聞くことができないことを辺地に譬えている。
- (35) 『浄土法門源流章』一卷(『浄全』第十五卷所収)凝然撰。一一三三(応長元)インド・中国・日本の三国にわたる浄土門の相承を明らかにし、さらに法然上人門下の諸流派の概要を述べたもの。
- (36) 良栄…理本 一四二三(〜応永三〇)。名越派の基礎を築いた学僧。業は高蓮社良栄。理本は聖岡とも親交を持ったために白旗流儀にも通じ、また藤田流儀にも精通していた。
- (37) 良栄『十六箇条疑問答見聞』(『続浄全』第一〇巻五頁上)
- (38) 覚瑜…一一五八〜一二三三(保元三〜天福一)。住心、出阿といい、また出雲路上人と呼んだ。天台宗。京都の人。諸行本願義を唱導した。
- (39) 法然『選択本願念仏集』(『浄全』第七卷七〇頁)
- (40) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷三四三頁下)
- (41) 明恵…高弁 一一七三〜一二三一(承安三〜寛喜四)明恵。法然上人の選択本願念仏を非難した華嚴宗の僧。『摧邪輪』三巻を著して、法然の『選択集』を破斥し、ついで『摧邪輪莊嚴記』一巻を著し、重ねて『選択集』を難破した。(『浄土宗大辞典』)
- (42) 公胤…一二一六(建保四)。明王院僧正とよぶ。はじめ法然上人の専修念仏に反駁し『浄土決疑抄』三巻を著して『選択集』を難詰した。のち法然に帰依し、『浄土決疑抄』を自ら焼いて、前非を悔いた。定照…十三世紀初め、上野(群馬県)の人。天台宗の僧。並榎の堅者という。『選択集』に対する反駁書『彈選択』を撰し、法然の門弟隆寛のもとへ送った。隆寛は定照の考えは誤りだとして『顯選択』を著して、之を対破した。これが嘉禄の法難の端緒となった。
- (43) 『選択集』元禄版の義山の跋(『浄全』第七卷七六頁)に「始章に三経の説時を論ず」と指摘されている。しかし、草稿本(廬山寺本)では、これを第十二章に述べてある。
- (44) 聖光『徹選択本願念仏集』(『浄全』第七卷七七〜一一一頁)
- (45) 良忠『徹選択抄』(『浄全』第七卷一一二〜一二三頁)
- (46) 聖聰『徹選択本末口伝抄』(『浄全』第七卷一二四〜一六二頁)
- (47) 聖聰『教相切紙拾遺徹』(『浄全』第七卷一六三〜一七五頁)
- (48) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷一八六〜三四九頁)
- (49) 良忠『選択伝弘決疑鈔裏書』(『浄全』第七卷三五〇〜三七八頁)
- (50) 良曉『決疑鈔見聞』(『浄全』第七卷三七九〜四四二頁)
- (51) 聖岡『決疑鈔直牒』(『浄全』第七卷四四三〜六一五頁)
- (52) 持阿(良栄増補)『選択決疑鈔見聞』(『浄全』第七卷六四〇〜九二四頁)
- (54) 浄土宗名越派良栄理本が著した諸見聞(注釈書類)の総称。その述作地、下野国(栃木県)大沢円通寺の地名にちなんで「大沢見聞」という。また、白旗派寂慧良曉の「寂慧見聞」(『坂下見聞』)に対して



「良榮見聞」といい、略して「榮見聞」ともいわれる。内容には、『伝通記見聞』『決疑鈔見聞』『東宗要見聞』『往生要集私記見聞』『論註記見聞』『法事讃私記見聞』『往生礼讃私記見聞』『観念法門私記見聞』『般舟讃私記見聞』『安樂集私記見聞』などがある。

(55) 持阿・良心（一〇一三四（正和三））。字は持阿弥陀仏。持阿ともいう。藤田派性心の後継者。浄土宗義に関する多くの注釈書を作り、「持阿見聞」といわれて重要視された人。

(56) 了慧『選択大綱抄』（『浄全』第八卷一〇六七頁）  
(57) 注（26）参照

### 三 第七章

#### ○第七章 光明攝取

【講義】當章の來由を明〔か〕さば、前章に特留念佛を明〔か〕す。是れ退代の益なり。已に退代の益を知らば、攝取の益を知るべし。故に前章に次〔い〕で光明攝取を明〔か〕す。

此〔の〕章は本集難關の隨一にして、且つ異論多し。故に豫め其〔の〕梗概を辨ぜん。

（一）大綱―今章の大意は、彌陀如來の心光攝取の益は、定散諸行の者に、（六一右）被らず。唯だ口稱名號の行者のみを照攝することを明〔か〕す。是れ即ち本願の義、三縁の義あるが故なり。具〔さ〕には私釋の如し。

(58) 良定『選択之伝』（『浄全』第八卷六八〇九二頁）

(59) 報夢五十余帖・浄土宗二祖弁長の弟子三祖良忠の著した著書の総称。分類して示すと（一）宗義門に『伝通記』十五卷・『決疑鈔』五卷・『徹選択鈔』一卷・『領解鈔』一卷・『三心私記』一卷・『鎌倉宗要』五卷（以上、解義血脈所伝）、『決答鈔』二卷・『法事讃私記』三卷・『往生礼讃私記』二卷・『観念法門私記』二卷・『般舟讃私記』一卷（以上、行儀血脈所伝）、（二）宗旨門に、『論註私記』五卷・『安樂集私記』二卷・『要集私記』八卷をあげることができる。

この〔第七〕章がここ〔第六章の次〕に置かれる理由を明らかにすると、前章で特留念仏について説明された。これははるか未来の利益である。はるか未来の利益を知ったならば、救いの利益を知らなければならない。したがって前章に続いて光明攝取について説明する。

この章は、この『選擇本願念仏集』で難解な章の一つであり、かつ異論が多い。したがって先にその概要を明らかにしよう。

（一）大綱―この章の大意は、阿弥陀如來の心光による摂取の利益は、定善散善の諸行を行じる者にはおよばず、ただ口称念仏の行者のみを照らし救いとることを明らかにすることである。摂取の利益が限定されるのは、本願による理由、三縁による理由があるからである。著者である宗祖の私見を述べる部分に詳しく述べられている。

(二) 色心二光―色光とは、念佛・諸行を分別せず。普く法界の情・非情を照(ら)すを色光と云(ふ)。「光明遍照十方世界」の文は(れ)なり。心光とは、此(の)色光を離れて別に之れ有るに非ず。光躰は、是れ一なりと雖も、佛、特に意を加へて念佛の行者を照攝したまふ。之を心光と云(ふ)。「念佛衆生攝取不捨」の文、是(れ)なり。

然るに彌陀の光明、別して念佛の行者を攝護することは、本願に相應するが故なり。譬へば暗夜に物を搜索するに、燈は一切の物を照(ら)すと雖も、意は唯(だ)所用の物を照(ら)すに在るが如し。又、念佛衆生の獨り攝益を蒙ること、譬へば諸草の中に葵のみ、日に向(き)て廻るが如し。「我はただ 佛にいつか葵草 心のつまにかけぬ日ぞなし」『観念門記』下(六左)、『見聞』下(五右)、『糝鈔』四十(七右)、『牒』八(四左)等参看」

又、佛光には、常光・神通光の別あり。常光は、常に照(ら)すと雖も、而も一尋等の分限ありて、偏く照(ら)すこと能はず。神通光は、偏く照(ら)すと雖も、而も一機一縁に被(り)て常に照らさず。然るに彌陀の光明は、心光(六一左)にして、且つ常光なり。常光と雖も、諸佛に異なりて、偏く十方の念佛の行者を照(ら)す。是れ第十二の願所成の光明なるが故に。是(れ)に由(り)て『大經』には「諸佛の光明も及ぶ能はざる所(なり)」と云(ふ)。

(二) 色心二光―色光とは、念仏・諸行を區別せず、この世のすべての心のあるものもないものも照らす光を色光と云う。「光明遍照十方世界」の文はこれを示している。心光とは、この色光と別にこれがあるのではない。光の本体は、一つであるが、仏は特に意を注いで念仏の行者を照して救い取られる。これを心光と云う。「念仏衆生攝取不捨」の文はこれを示している。

ところで、阿彌陀仏の光明が、特別に念仏の行者を救い護ることは、「念仏が」本願の意にかなうからである。例えば、暗夜に捜し物をするとき、灯火はすべての物を照らす、気持ちとしては、ただ捜している物だけを照らしているように思えるのと同様である。また、念仏衆生だけが救いの利益を蒙ることは、例えば、草々の中で葵だけが、日に向かって廻るようなものである。「我はただ 仏にいつか葵草 心のつまにかけぬ日ぞなし」『(良忠) 観念法門私記』下(六丁左)、『(聖聰) 観念法門私記見聞』下(五丁右)、『(聖罔) 伝通記糝鈔』四十(七丁右)、『(聖罔) 決疑鈔直牒』八(四丁左)等を参照」

また仏の光には、常光・神通光の區別がある。常光は、常に照らす、一尋(五)の限度があつて、すみずみまでもれなく照らすことはできない。神通光は、すみずみまでもれなく照らす、特定の人が特定の条件のもとで受けるので、常には照らさない。ところが阿彌陀仏の光明は、心光であつて、なおかつ常光である。常光といつても、諸仏とは異なり、すみずみまでもれなく十方の念仏の行者を照らす。これは第十二の願(六)を成就した光明だからである。したがつて『無量寿經』には「諸仏の光明のおよぶところではない」と云う。(七)

(三) 願非願鉢―攝取不捨は、第十二願の鉢に非ざることは、諍ひ無しと雖も、之を第三十三觸光柔軟の願鉢と爲すと否とは、諸師の議論なり。謂く、望西は「攝取不捨」即ち三十三の願鉢と立て、禮阿は「攝取」は願鉢なり。「不捨」は願鉢に非ずと云〔ふ〕。是れ望西と大同少異なり。相傳の義は、俱に願鉢に非ず。何んとなれば、第十八願は名、第十二願は義なり。名義不離にして、攝取不捨の益あり。此〔の〕益を蒙るを觸光柔軟と云〔ふ〕。然れば攝取不捨は佛の護念、觸光柔軟は機の得益なり。故に「攝取不捨」、直〔ち〕に觸光柔軟の願鉢と云〔ふ〕べからず。

(四) 名義不離―亦是名義具足と云〔ふ〕。問〔ふ〕。名鉢不離と名義不離と何の別ある。答〔ふ〕。大旨は同じと雖も、細〔クハシ〕く分別せば、名鉢義用の四あり。名は第十八願の名號なり。鉢は第九觀の佛身なり。義は第十二願の光明なり。用は〔六二右〕第三十三願の觸光柔軟なり。案ずるに、善導・少康の、口に名號を稱して、化佛を吐きたまふ如きは、是れ名鉢不離なり。又元祖大師の暗夜に念佛して、光明を放ちたまふ如きは、名義不離なるべし。但し此〔れ〕等は、皆三昧發得の相なれば、敢〔へ〕て定準なり難しと雖も、且く少異あるの例となすべし。但し諸處の釋は多く、身光不離に約して、名鉢不離とも、名義不離とも云〔ふ〕と見へたり。是〔れ〕より進〔み〕て、名義不

(三) 願非願体(願の本体であるかそうでないか)―攝取不捨は、第十二願の誓願の本体ではないことについて異論はないが、これを第三十三觸光柔軟の願の本体とするかどうかについては、諸師の議論するところである。つまり、道光〔望西〕<sup>9</sup>は、「攝取不捨」を第三十三の願の本体であるとし、然空〔礼阿〕<sup>10</sup>は、「攝取」は願の本体であり、「不捨」は、そうではないという。この説は道光と大同少異である。相傳の説は、<sup>11</sup>どちらも願の本体ではないとする。なぜなら、第十八願は「名(名号)」、第十二願はその内容である「義(光明)」である。<sup>12</sup>切り離すことができない「名」と「義」がともにはたらいてこそ、攝取不捨の利益がある。この利益を蒙ることを觸光柔軟という。したがって攝取不捨は仏の護念であり、觸光柔軟は衆生の受ける利益である。よって「攝取不捨それ自体が觸光柔軟の願の本体だ」とは云うべきではない。

(四) 名義不離―または名義具足と云う。【問】質問する。名体不離と名義不離とどこがちがうのか。【答】答える。おおよそ同じであるが、細かく区別すると、名(名称)・体(名で示されるものの本体)・義(名の内容)・用(名で示されるものはたらき)の四つがある。名は第十八願の名号である。体は第九觀の仏身である。義は第十二願の光明である。用は第三十三願の觸光柔軟である。考えてみると、善導・少康が口に名号を称えて、化仏を口から吐かれているのは、名体不離(名とその本体、すなわち名号と仏身は離れることがないこと)を示している。また、元祖大師の暗夜に念仏して、光明を放たれたのは、名義不離(名と名の内容、すなわち名号と光明が離れることがないこと)を示しているといえよう。ただし、これらは、すべて三昧の境地を体得された姿であるから、特に定まった基準とすることは難しいが、とりあえず、わずかではあるが相違点がある例とすることができよう。ただし、この解釈は諸処にあつて、多くは身光不離という立

離の相を釋せば、阿彌陀、此〔こ〕に無量と翻す。無量の言は、一切萬徳を攝盡するが故に、光明も亦無量なり。是〔れ〕に由〔り〕て、行者、口に名號を呼稱すれば、名が上の義相たる光明、之れに應じて顯はる。故に、光明名號不離なり。之を名義具足と云〔ふ〕。而して記主《『鈔』三・二七》、名義不離と釋すと雖も、未だ其〔の〕文を出さず。試〔み〕に其〔の〕文を挙げば、『小經』に云〔はく〕、「彼の佛の光明、無量にして、十方の國を照〔ら〕すに、障礙する所無〔し〕」。是〔の〕故に號して阿彌陀と爲〔す〕。『大經』には、十二光の名あり。又『論註』下・四右、「彼の如來の名を稱し、彼の如來の光明智相の如く、如實に修行して相應せんと欲するが故に。《論文》「稱彼如來名」とは〔者〕、謂く、無礙光如來の名を稱するなり〔也〕。」「如彼如來光明智相」とは〔者〕、佛の光明は、智慧の相なり〔也〕。此の光明、十方世界を照〔ら〕すに、障礙する所無〔し〕。《中略》如實に修行せず〔不〕して名義と〔與〕相〔六二左〕應ぜざ〔不〕るに由る」と。名義具足の言、蓋し此〔れ〕に基づく。

(五) 觀稱分別―念佛の言は、廣く觀稱に涉ると雖も、今は稱名念佛なり。但し所引の經文の前後を見るに、第八像觀の終〔り〕に、「念佛三昧」と云ひ、亦今文の次下に、

場から、名体不離とも、名義不離とも云われるように受け止められる。このことから論を進めて名義不離について解釈すると、阿彌陀仏は、中国で無量と翻譯された。無量の語は、阿彌陀仏のすべての徳を含蓄するから、「阿彌陀仏の徳のひとつである」光明もまた無量である。これによって、行者が口に名號を稱えれば、名の示す内容〔義相〕である光明は、それ〔稱名〕に応じて現れる。したがって、光明と名號は離れることはない。これを名義具足と云う。しかし、良忠《『決疑鈔』三・二七》<sup>13</sup>は、名義不離と解釈しながら、それを示す經論の文を出していない。試みにその文を挙げると、『阿彌陀經』には、「彼の仏の光明は無量であり、何ものにもさえぎられることなくあらゆる國を照らす。したがって阿彌陀と名づけられる」とある。『無量壽經』には、十二光の名がある。また、〔曇鸞〕『往生論註』下・四丁右<sup>14</sup>には、「阿彌陀如來の名を稱え、阿彌陀如來の光明・智慧のすがたのように、ありのままに修行をして、名に込められた内容にふさわしくありたいと欲するからである。」「《世親》『往生論』の文」とある。「阿彌陀如來の名を稱え〔稱彼如來名〕」とは、すなわち無礙光如來の名を稱えることである。「如來の光明・智慧のすがたのように〔如彼如來光明智相〕」とは、仏の光明は、智慧が外に現れた姿である。この光明があらゆる世界を照すのに、さまたげられることはない。〔中略〕〔稱名念佛〕していても、なおも無知でありつづけ、願いが一向にかなわないものがあるのは」ありのままに修行しないで、その仏の「名」と「義〔名の内容〕」にふさわしくないからである。」<sup>15</sup>とある。名義具足についての解釈は、これに基づくものであろう。

(五) 觀稱分別―念仏の語は、觀仏と稱名の両方を示すが、ここでは稱名念仏を意味する。ただし引用されている經文の前後を見ると、第八像觀の終りに、念仏三昧といい、またこの文のすぐあとに、念仏三昧という。これらは、どちらも

「念佛三昧」と云（ふ）。此（れ）等は、皆觀念なり。而して中間の今文を稱念と爲すは、是れ大師、自解佛願の妙釋にして、他師の企て及ぶ所に非ず。又觀佛の中に、口稱の念佛を説くことは、是れ觀成の所見なり。謂く、定善の機、觀成就の位に、佛の八萬四千の相好光明を拜する時、彌陀舉身の光明は、唯（だ）念佛の行者のみを照（ら）すを見知す。是れ佛の本意、念佛に在るが故なり。『鈔』三（二七）對照すべし。

◎大科三段。初（め）に篇目。

【本文】彌陀光明、不照餘行者、唯攝取念佛行者之文。

【講義】「攝」は攝護、「取」は不捨、即ち念佛の行者をば、如來大悲の掌中に握（り）て、護念すと云（ふ）意なり。

『鈔』三（二六）に唯蓮房の因縁を載す。

◎（六三右）次に引文に三。初（め）に『觀經』。

【本文】觀無量壽經云、無量壽佛有八萬四千相。一一相各有八萬四千隨形好。一一好復有八萬四千光明。一一光明徧照十方世界、念佛衆生攝取不捨。

【講義】「相好」とは。「相」は佛身の相狀、了知すべきことと易きを「相」と云ひ、「相」をして端嚴微妙ならしむるを「好」と云（ふ）。是れ麁細の不同なり。

○「光明徧照」等とは。以下の十六字に就て、『定記』三（四紙）、二義を成す。初義は、色心二光に約して分別す。

觀念である。しかし、中間のこの文を稱念とするのは、善導大師自らが明らかにされた阿彌陀仏の本願に対するみごとな解釈であり、他の祖師たちの解釈の及ぶところではない。また、觀仏の中に、口で称える念仏を説くことは、觀仏が成就した人によって見られることである。つまり、定善の修行に耐えることのできる人が、觀仏成就の境地に達して、仏の八萬四千の相好の光明を拜する時、阿彌陀仏の全身の光明が、ただ念仏の行者のみを照らす様子を見る。これは仏の本意が、念仏にあるからである。（良忠）『決疑鈔』三（二七丁）<sup>18</sup>を對照するように。

◎大きく三段落に分ける。最初にこの章の表題

之文。

「攝」は救い取り護ること、「取」は捨てないことである。つまり念仏の行者を、如來が大悲の掌の中に握（り）て、心をかけて守護するという意味である。（良忠）『決疑鈔』三（二六丁）<sup>19</sup>に唯蓮房の因縁を載せている。

◎第二に引用文。引用文は三つあり、最初に『觀無量壽經』を引く

一一相各有八萬四千隨形好。一一好復有八萬四千光明。一一光明

「相好」について。「相」は仏身の姿形のわかりやすい特徴を「相」と云い、「相」を言葉に表せないほど美しくさせている特徴を「好」と云う。これは粗大と微細の違いである。

○「光明徧照」等について、以下の十六字について、（良忠）『觀經疏伝通記（定善義）』三（四紙）<sup>20</sup>に、二つの解釈をしている。初めの解釈は、色心二光によつ



謂く、「一一の光明、徧く十方世界を照らして《色光》、念佛の衆生を攝取して捨〔て〕たまはず〔不〕《心光》」。後義は、心光の一邊を取る。謂く、「一一の光明、徧く十方世界の念佛の衆生を照〔ら〕して、攝取して捨〔て〕たまはず〔不〕」と訓ず。此〔の〕二義、取捨なきが故に、俱存なるべしと雖も、次下所引の『觀念門』及び『禮讃』に依るに、前義は、正〔し〕く導師の釋意に合す。

然るに『新記』四〔十紙〕《西山（六三左）派貞準》には、『定記』の後義を成立し、前義を破して謂く、「若し色心二光を分別せば、『攝取念佛衆生不捨』と言ふべし。文言倒置す」云云と。ああ彼れ何ぞ僅かに文言倒置の末節に拘はつて色光周遍、心光攝護の大義に通ぜざるや。抑〔も〕此〔の〕文を色心二光に約することは、源と導師の定判に出〔で〕たり。『禮讃』に云〔はく〕、「相好光明照十方《色光》、唯有念佛蒙光攝《心光》」と。又、次下所引の『觀念門』、分明に色光二光を分別せり。又、大師詠じて曰〔く〕、「月影のいたらぬ里はなけれども《色光》ながむる人の心にぞすむ《心光》」。斯〔く〕の如く祖傳の明文を見ながら、尚ほ心光一邊の義を固執する者、果して何の爲めぞや。

◎次に定善義の中に二。先に牒文標科。

て分ける。つまり、「一一の光明、あまねく十方世界を照らして《色光》」、「念佛の衆生を攝取して捨てたまはず《心光》」とする。二つ目は、心光のみであると取る解釈である。つまり、「一一の光明、あまねく十方世界の念佛の衆生を照らして、攝取して捨てたまはず。」と訓読する。この二つの解釈は、『三祖良忠が』一方を取って他方を退けることはしなかったので二説併存するとしてよいが、すぐあとに引用される〔善導〕『觀念法門』及び〔善導〕『往生礼讃』の文によると、最初の解釈の方が、正しく善導大師の解釈の趣旨に合致する。

ところが、『觀經四帖疏新記』四〔十紙〕《西山派貞準》<sup>21</sup>には、〔良忠〕『觀經疏伝通記（定善義）』の第二の解釈を立て、最初の解釈に反論して、「若し色心二光を分けたならば、『攝取念佛衆生不捨』と言わなければいけない。文言が倒置している」云云と云う。ああ、彼は、どうしてわずかに文言倒置の些細なことにこだわって、色光は徧く行き渡り心光は救い護る（色光周遍心光攝護）ということ切な意味を理解しないのか。そもそも、この文を色心二光によって解釈することは、もとは善導大師の判定によつた解釈である。『往生礼讃』では、「相好の光明は十方を照らす《色光》、唯だ念佛のもののみ有つて光摂を蒙る《心光》」と云われている。また、その次に引用されている『觀念法門』では、はっきりと色光二光を区別されている。また、法然上人は、「月影のいたらぬ里はなけれども《色光》ながむる人の心にぞすむ《心光》」と詠われている。このように祖師たちの伝えられた解釈の文を見ながら、なお心光のみの解釈に固執するのは、いったい何のためであろうか。<sup>22</sup>

◎引用文の第二は『觀經疏定善義』中の二文を引く。まずは觀無量寿經の文を区



切つて分科し（牒文）<sup>(23)</sup>、その内容を標示（標科）する。

【本文】同經疏云、從無量壽佛下至攝取不捨已來、

正明觀身別相光益<sup>スルコトヲ</sup>有緣<sup>上</sup>。

【講義】「身別相」とは。六十萬億の佛身の總に對して、

八萬四千の相好光を別相と（六四右）云（ふ）。

○「有緣」とは。念佛の衆生を云（ふ）。

「身別相」について、六十萬億（那由他恒河沙由旬の高き）の仏身の總体的な特徴に對して、八萬四千の相好の光を個別的な特徴（別相）と云う。

○「有緣」とは。念仏の衆生を云う。

◎後に正釋に二。先に直釋に亦二。先に標。

【本文】即有其五。

◎次に二段に分けて正しく解釈（正釈）する。まずは經文に對する直接の解釈（直釈）。それをまた二段に分ける。先ず標示。

◎後に釋。

【本文】一明相多少、二明好多少、三明光多少、

四明光照遠近、五明光所及處偏蒙攝益。

【講義】「多少」とは。『定記』三「十六」云（はく）、

「八萬」等と言ふと雖（も）、一一別說せず（不）。故に

《少》と云（ふ）なり（也）。若し別說せば（者）、説き盡

（く）すべ（可）からず（不）。故に《多》と云（ふ）な

り（也）。『釋鈔』四十「三五」云（はく）、「八萬四千の

數量を《少》と云（ふ）。不可具說の非數量は、是れ多

り（也）」と。或が曰（く）、多少は只是（れ）數量の義な

り。即ち八萬四千を云（ふ）。

○「光照遠近」とは。極樂と隣近の衆生を照（ら）すを

「近」と云ひ、極樂と遼遠の衆生を照（ら）すを「遠」と

云（ふ）『觀經私記』「十二」云。或が曰（く）、是れ亦只遠

く十方に及ぶを遠近と云ふ。

◎直釈の二つめは解釈。

「多少」について、「良忠」『觀經疏伝通記（定善義）』三「十六」に、「八萬」

等と言つても、ひとつひとつ別々に説明していいない。したがって《少》と云うので

ある。もしひとつひとつ説明したならば、説きつくすことはできない。したがって

《多》と云うのである」と云う。（聖岡）『伝通記釋鈔』四十「三五」に、「八萬

四千と数えられる量を《少》と云う。詳細に説くことのできない（不可具說）ほ

どの数えられない量が《多》である。」と云う。ある人は、「多少はただ數量（が

多い）」という意味で使われているだけである。つまり八萬四千のことである。」

と云う。

○「光照遠近」について、極樂に近い衆生を照らすことを「近」と云い、極樂か

ら遠く離れた衆生を照らすことを「遠」と云う『觀無量壽經釋』「十二」<sup>(27)</sup>。ある

人は、「これもまた、ただ遠く十方に及ぶことを遠近と云うだけである」と云ふ。

◎(六四左) 後に問答に二。先に問〔ひ〕。

【本文】問曰、備修<sup>ニメ</sup>衆行<sup>ヲ</sup>、但能廻向<sup>スレバ</sup>、皆得<sup>ニ</sup>往生<sup>ヲ</sup>。何以佛光普照<sup>カクスニ</sup>、唯攝<sup>スル</sup>念佛者<sup>ノノミヲ</sup>、有何<sup>ニ</sup>意<sup>也</sup>。

【講義】『鈔』三・二九云〔はく〕、「意の云〔はく〕、諸行の〔之〕人、皆往生を得。然るに佛の光明、十方に周遍す。何ぞ餘行の窓を照〔ら〕さず〔不〕して、偏に念佛の者を攝取するや。若し照〔ら〕すと云〔は〕ば〔者〕、何ぞ攝益を惜〔しま〕ん。平等の慈悲に偏頗有るに似〔た〕り。」

◎正釈の第二は問答。それを二段に分ける。問答の最初は問。『決疑鈔』三・二九<sup>29</sup>には次のように云う。「その意味は以下の通りである。諸行を行じる人も、皆往生をすることができ。そして仏の光明は十方に行き渡る。どうして念仏以外の行の窓を照らさず、ただ念仏を称える者のみを救い取るのか。もし照らすと云うのなら、どうして救い取るという利益を惜しむのか。平等の慈悲に不公平さがあるようにみえる。」

◎後に答の中、三。初〔め〕に直答に二。先に正〔し〕く義門を示す。亦二。先に標〔す〕。

◎問答の第二は答。答の中に三段。その最初、直接の答えに二段。直接の答えの第一は内容によって分け〔義門〕で説明する。またそれを二つに分ける。まずは標示。

【本文】答曰、此有<sup>ニ</sup>三義<sup>一</sup>。

◎後に釋に三。初〔め〕に親縁を釋す。

◎続いて解釈。三つに分ける。第一は親縁について解釈する。

【本文】一明<sup>ニ</sup>親縁<sup>ヲ</sup>。衆生起<sup>シテ</sup>行口<sup>ヲ</sup>常稱<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>、佛即聞<sup>下</sup>之。身常禮<sup>ニ</sup>敬<sup>スレバ</sup>〔六五右〕佛、佛即見<sup>下</sup>之ヲ。心常念<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>、佛即知<sup>下</sup>之。衆生憶<sup>ニ</sup>念<sup>ヲ</sup>佛、佛亦憶<sup>ニ</sup>念<sup>ヲ</sup>衆生。彼此三業不相捨離、故名<sup>ニ</sup>親縁<sup>ト</sup>也。

【講義】親縁・近縁の解釋は、第二章親疎對・近遠對の下に已に釋するが如し。

親縁・近縁の解釈は、第二章の親疎對・近遠對について解釈した通りである。

◎次に近縁を釋す。

◎次に、近縁について解釈する。

【本文】二明<sup>ニ</sup>近縁<sup>ヲ</sup>。衆生願<sup>スレバ</sup>見<sup>ント</sup>佛、佛即應<sup>シテ</sup>念現<sup>ニ</sup>在目前<sup>ニ</sup>、故名<sup>ニ</sup>近縁<sup>ト</sup>也。

◎後に増上縁を釋す。

【本文】三明<sup>ニ</sup>増上縁<sup>ヲ</sup>。衆生稱念<sup>スレバ</sup>、即除<sup>ク</sup>多劫罪<sup>ノ</sup>。命欲<sup>スル</sup>終時<sup>ニ</sup>、佛與<sup>ニ</sup>（六五左）聖衆<sup>ニ</sup>自來迎接<sup>シテ</sup>。諸邪業繫無<sup>ニ</sup>能礙者<sup>ル</sup>。故名<sup>ニ</sup>増上縁<sup>ト</sup>也。

【講義】「増上縁」とは。先づ三の少異あることを分別すべし。一には性相所談、二には本宗常談、三には當段所論なり。

一に性相所談とは、是れ四縁の中の一にして、能く法を起「こ」すの勝縁なるが故に、増上縁と名「づ」く。眼根勝縁と爲りて、眼識を生ずるが如し。但し之に與力・不障等の分別あり。具「さ」には『玄記』三〇十二に、『俱舍』『唯識』等の諸文を引「き」て辨ずるが如し。

二に本宗常談とは、末世凡愚の機は、自力の得度、已に分を絶すれども、彌陀の願力、能く五乗を攝して、齊しく報土に往生せしむるが故に、佛願力を以て増上縁と爲す。『玄義』三〇に云「はく」、「正」し「く佛願に託して、以て強縁と作すに由」りて、五乗をして齊「し」く入らし「使」むることを致す」と。又『序分義』三五に云「はく」、「彌陀本國四十八願、願願皆増上の勝因」を「發」す」と。

三に當段所論とは、是れ亦本願を強縁と爲すことを以て、上と異なることなし。然れども今は別して念佛の行者、臨

◎次に、増上縁について解釈する。

「増上縁」について、まず、三つのわずかに異なる「解釈」のあることを分析しよう。第一には性相所談（俱舍・唯識の説）、第二には本宗常談（浄土宗の説）、第三には當段所論（この章の説）、の三つに分けられる。

第一に性相所談とは、四縁の中の一つであり、存在（ものごと）を引き起こすことができるすぐれた縁であるから、増上縁と名づける。視覚をつかさどる感覚器官（眼根）がすぐれた縁となつて、視覚による認識作用（眼識）が生じるのがその例である。ただし、この「増上縁」に力を付与し補助するもの（与力）と邪魔をしないもの（不障）等の区別がある。くわしくは「良忠」『觀經疏伝通記（玄義分）』三〇十二丁に、『俱舍論』『成唯識論』等の諸文を引いて説明している通りである。

第二に本宗常談とは、末法の世の平凡で愚かな能力のものは、自分の力で修行して悟りを開くことなどは、その分際をはるかに越えたことであるが、阿彌陀仏の本願の力は、人間乗・天乗・声聞乗・縁覚乗・菩薩乗の五乗すべてを救い取ることができ、すべてを報土に往生させるから、仏の本願力を増上縁とする。「善導」『觀經疏玄義分』三〇に<sup>33</sup>には、「まさしく仏の本願力に身を委ね、それが強い縁となつて、五乗みな往生できるのである。」と説く。また「善導」『觀經疏序分義』三五<sup>34</sup>には、「阿彌陀仏の本國は四十八願よりできており、ひとつひとつの願がすべて強く勝れた因となつている。」と説く。

第三に當段所論とは、これもまた本願を、強い縁とすることは前の第二の解釈と違ひはない。しかし今は區別して、念仏の行者が臨終に聖衆の迎接をこうむつて

終に聖衆の迎接を感じて、罪障を除滅する邊を取るが故に、其〔の〕對する所、念佛の行者に限る。是れ其〔の〕少異なり。

○「除多劫罪」とは。五十億（六六右）劫、或〔い〕は八十億劫等の多劫を経歴して、生死流轉すべき罪業の力用を除くなり。

○「諸邪業繫」等とは。無始の業障は、三界繫縛の法なれども、佛願の強縁に依〔り〕て、能く之を除滅するが故に、往生を障礙せざるを言ふ。又此〔れ〕に外魔を言はざれども、外魔亦障<sup>(マヤ)</sup>ゆるを得ず。『鈔』に辨ずるが如し。又『鈔』三（三二）、「問〔ふ〕。佛名を稱する時、多劫の罪を除く。何ぞ迎接に至〔り〕て、亦邪業有〔ら〕ん。答〔ふ〕。罪障、蓋し多し。頓に滅すべ〔可〕からず〔不〕。故に稱念の時、罪障を滅すと雖〔も〕、而〔して〕聖衆を見て、能く殘殃を除く」《此〔の〕意は、念佛の機能を論ずれば、一念と雖も、能く所有る罪を滅すと雖も、機に強弱あり。行に淺深あり。罪類、亦一準ならず。故に滅罪に遲速あることを致すなり。『釋鈔』の意。》又云〔はく〕、「問〔ふ〕。増上縁の中の聖衆來迎と、上の近縁の見佛と（與、何の別ある。答〔ふ〕。近縁の見佛は、則〔ち〕是れ平生なり。此〔の〕中の來迎は、乃〔ち〕是れ臨終なり。故に混亂せ

罪障を除滅することに観点をおくから、その対象は念仏の行者に限られる。これは第二の解釈とわずかではあるが異なるところである。

○「除多劫罪」とは。五十億劫、あるいは八十億劫等の計り知れない年月を巡りめぐって、生まれかわり死にかわり流轉しつづけなければいけない罪業のはたらしを除くことである。

○「諸邪業繫」等について、無限に遠い昔から積み重ねてきた悪業による障害は、迷いの世界である三界に繋ぎ止める存在であるが、仏の本願の強い縁によつて除滅できるから、往生を妨げることがないことを云う。またここでは〔邪業と言うのみで〕外から襲ってくる悪魔について言つてはいないが、外から襲ってくる悪魔もまた往生を妨げることができない。〔良忠〕『決疑鈔』で説明されている通りである。<sup>(35)</sup> また、〔良忠〕『決疑鈔』三（三二）に、〔問〕質問する。仏名を稱する時、多劫の罪を除く。どうして來迎の時まで、邪業が有ろうか。〔答〕答える。罪障は確かに多い。すぐには消し尽くしてしまうことはできない。したがつて稱念の時、罪障は〔ある程度〕消えてしまふが、聖衆を見て〔さらに〕残りの悪業を除くのである。<sup>(36)</sup> 《この文の趣旨は、念仏の功德について論じると、たとえ一念でも、あらゆる罪を滅することができるといつても、能力に強弱があり、行に淺深があり、罪についても、さまざまである。したがつて滅罪に遲速が生じるのである。〔聖問〕『伝通記釋鈔』<sup>(37)</sup>。また、〔問〕質問する。増上縁の中の聖衆來迎と前に説かれた近縁の見仏と、どこが異なるのか。〔答〕答える。近縁の見仏は、平生におけるものである。ここに説かれる來迎は、臨終である。したがつて混同

ず（不）」と。但し宗祖『觀經私記』には、近縁は、平生・臨終に通ずと云（ふ）。此（の）相違を會すること、『牒』八（五左）、「唯（だ）平生に約するは、一往なり。實には臨終に通ずべし」と。又『糝鈔』四十（二三）に「各據一義」と云（ふ）。

以上、三縁に就（き）て、『鈔』三（三二）（に）云（はく）、「若し五縁に約せば、『觀念門』所明の五種増上縁」近縁は（者）、即（ち）護念と見佛との二縁なり。増上縁は（者）、滅罪と攝生との二縁なり。三縁、皆凡夫に約するは、即（ち）是れ證生縁なり（也）（六六左）と。但し『觀念門』には、五種皆増上縁と云ふ。今の三縁、亦皆増上縁と云（ふ）べし。然（る）に今は、除障の義、最も強き邊に従へて、總屬別名して、第三のみを増上縁と云（ふ）。『糝鈔』四（二四）

◎後に比校顯勝

【本文】自餘衆行雖名是善、若比念佛者、全非比校也。

【講義】『鈔』三（三七）（に）云（はく）、「此れ念佛と諸善と（與）、即（ち）光の攝・不攝の異有（る）が故に、二行を校量するに、勝劣懸隔なるを明（か）すなり（也）。《中略》定は心を凝（ら）すと雖（も）、理は深微なりと雖（も）、大心大行は心行勝（れ）たりと雖（も）、律儀孝

されることはない。」とある。ただし宗祖『觀無量壽經釈』<sup>(38)</sup>には、近縁は、平生・臨終共にに通じると言われている。この矛盾の会通は、『決疑鈔直牒』八（五左）<sup>(40)</sup>、「ただ平生についてのみ言うのは、ひとまずの解釈である。実際には臨終にも通じる」とする。また『伝通記糝鈔』四十（二三）<sup>(41)</sup>に「それぞれが根拠に基づいて説を立てている（各拠一義）」とある。

以上、三縁について、『決疑鈔』三（三二）<sup>(42)</sup>に、「もし五縁という観点からみると『觀念法門』で説き明かしている五種増上縁」、近縁は、護念増上縁と見仏増上縁との二縁である。増上縁は、滅罪増上縁と攝生増上縁との二縁である。三縁すべて凡夫に関するものであるから、証生縁である。」と云う。ただし『觀念法門』には、五種はすべて増上縁と云う。この（親縁・近縁・増上縁の）三縁もまたすべて増上縁と云うべきである。しかし今は、障りを除くという意味が最も強いという面に重点をおいて、すべてに通じる名前ではあるがここでは特別に、第三の關係のみを増上縁と名づけて云う。『伝通記糝鈔』四（二四）<sup>(43)</sup>

◎直接の答えの第二、比較して（念仏が）勝れていることを明らかにする。

【本文】決疑鈔三（三七）に次のように云う。「念仏と諸善とは、仏の光明に救い取られるか救い取られないかの違いがあるので、二行を比較すると勝劣には大きな隔たりがあることを明らかにしている。《中略》三昧は心を集中して散乱を静めるのではあるが、永遠の真理（第一義）は深遠で微妙ではあるが、菩提心や大乘仏教の修行は心も行も勝れているのではあるが、戒や孝行のすぐれた行いは立派



道は妙業貴しと雖（も）、佛の本願に望（む）れば、念佛獨り秀（で）たり。故に《非比》と云（ふ）」。

◎次に引證。

【本文】是故諸經中、處處廣讚念佛功能。如無量壽經四十八願中、唯明下專念彌陀名號得生。又如一彌陀經中、一日七日專念彌陀名號得生。又十方恒沙諸佛、證誠不虛也。又此經定散文中、唯標下專念名號得生。此例非一也。

【講義】「諸經」とは、廣く淨土所依の一代諸經を指す。然（る）に「如無量」以下、先づ正依の三經を引（き）て、傍依の餘經を例知せしむ。故に下文に「此例非一」と云（ふ）。妙樂の謂ゆる「諸經所讚多在彌陀」の意なり（也）。

○「如無量」等とは。此（の）『大經』の意を解するに二義あり。一には總じて『大經』一部を指して、「四十八願」と云（ふ）。本願と果成と相ひ離れざるが故に。此（の）經の所詮、専ら念佛に在り。所謂第十八願文及び成就の文、三輩・流通、俱に念佛を明（か）す。故に餘行を簡別して、「唯明」と云（ふ）。是れ釋尊隨自意に約す。二には四十八願の中に、諸行來迎の言あれども、本願の生因は、唯（だ）念佛に在り。故に餘行を簡去して、「唯明」と云（ふ）。是れ（六七左）彌陀の本願に約す。

ではあるが、仏の本願を念頭に置くなら、念仏のみがとりわけすぐれているのである。したがって《非比（比較にならない）》と云う」。

◎正積の第二、証拠としての引用（引証）

「諸經」について、廣く淨土宗が依拠とする、釈尊が生涯に説かれた諸經典を指す。しかし、「如無量」以下、まずまさしく依拠とする三つの經典を例として引（き）用して、傍論として二次的に淨土の教えについて説き明かした三部經以外の經典にも説くことを知らせたのである。したがって、すぐ後の文に「此例非一」と云うのである。湛然<sup>15</sup>が言われている「諸經所讚多在彌陀<sup>16</sup>」ということの意味する。

○「如無量」等について、ここで『無量壽經』の「四十八願の中では、ただひたすらに阿彌陀仏の名号を念じさえすれば極樂に往生できる」と言われている趣意についての解釈に、二つの理解の仕方がある。第一は『無量壽經』全体を指して「四十八願」と云う、という理解である。本願と願成就の文は切っても切れない関係である。この經は念仏についてのみ説こうとしている。いわゆる第十八願文及び成就の文、三輩・流通はすべて念仏について説き明かしている。したがって念仏以外の行を選び差し置いて、「唯明」と云う。これは、釈尊が自分の本心に忠実にあらうとする決意を持って説いた相手に対しては念仏以外の行をひとまず捨て念仏のみを説いた「隨自意」という観点による理解である。第二は、四十八願の中には、諸行來迎<sup>17</sup>の語もあるが、本願（第十八願）で誓われている往生の因は、ただ念仏のみにある。したがって念仏以外の行を選び捨てて、「唯明」と



○「又如彌陀經」等とは。此〔の〕中、二文あり。始〔め〕は一日七日執持名號の文、又十以下は六方段の文なり。而して此〔の〕經の所説は、唯〔だ〕念佛のみにして、更に餘行の簡ぶべき無ければ、「唯」の字を置かず。

○「又此經」等とは。今『疏』は、『觀經』の釋なるが故に、『觀經』を指して「此經」と云〔ふ〕。此〔の〕文を解するに亦二義あり。一に云〔はく〕、定善の中に、「念佛衆生」と云ひ、下三品及び流通付屬の段に、慇懃に念佛を勧む。故に、餘行を簡去して、「唯標」と云〔ふ〕。是れ釋迦の隨自に約す。二に云〔はく〕、『觀經』一部の中、定散の往生を説くと雖も、本願の生因は、念佛に在り。故に「唯標」と云〔ふ〕。是れ彌陀の本願に約す。上來、『大經』『觀經』に就〔き〕て、各〔の〕二義を成ずるは、『鈔』三〔三七〕に委曲なり〔也〕。

○「此例非一」とは。凡そ證に於て正證・助證・例證の三あり。今は例證なり。謂く、三經に依〔り〕て、念佛得生の證を擧〔げ〕て、之を當段の光明攝取の念佛に局るに例す。故に「此例」と云〔ふ〕。又「此例」は、獨り三經のみに限らず、諸經の中に多く之れ有ることを顯はして、「非一」と云〔ふ〕。《糅鈔》四十〔三四〕取意》

云う。これは阿彌陀仏の本願という観点による理解である。

○「又如彌陀經」等について、この中に、二つの文がある。最初は一日七日執持名號の文、「また十」以下は六方段の文である。したがって、この經が説いているのは、ただ念仏のみであり、選り捨てべき、その他の行を説かないので、「唯」の字を置いていない。

○「また此經」等について、この『觀經疏』は、『觀無量壽經』の解釈の書であるから、『觀無量壽經』を指して「此經」と云う。この文の解釈にまた二つの仕方がある。第一は、定善の中、「第九觀に」「念仏衆生」と云い、下三品及び流通付屬の段に、慇懃に念仏を勧める。ゆえに、念仏以外の行を選り捨て、「唯標」と云うとする理解である。これは釈尊が自分の本心に忠実にあらうとする決意〈隨自意〉という観点による理解である。第二は、『觀無量壽經』全体の中、定善散善による往生を説いてはいるが、本願で誓われている往生の因は、ただ念仏のみにある。したがって「唯標」と云うのであるとする。これは阿彌陀仏の本願という観点による理解である。以上の『無量壽經』『觀無量壽經』について、それぞれ二つの理解の仕方を立てるのは、『決疑鈔』三〔三七〕<sup>48</sup>に詳しく述べられている。

○「此例非一」について、証拠を分類すると、直接の証拠（正証）・間接的な証拠（助証）・例による証拠（例証）の三つがある。ここは例証である。つまり、三部經によつて、念仏を称えるものは往生できる証拠をあげ、この章の阿彌陀仏の光明に攝取されるのは念仏を称えるものに限る例としたのである。したがって「此例」と云う。また「此例」は、三部經のみに説かれるのではなく、諸經の中に多く説かれることを表して、「非一」と云う。《聖問》『伝通記糅鈔』四十〔三四丁〕取意<sup>49</sup>》

◎後に結示

【本文】(六八右) 廣顯念佛三昧竟。

【講義】『觀經』第九觀は、佛身觀にして、觀佛三昧なり。其〔の〕中に觀成所見の相を、「光明遍照」等と説きたまへり。此〔の〕文に由〔り〕て、廣く念佛三昧三緣攝取の相を釋し畢る。故に今觀佛に簡異して、念佛三昧と云〔ふ〕。『十八通』下へ十六へ

◎後に『觀念門』

【本文】觀念法門云、又如前身相等光、一一偏照十方世界。但有專念阿彌陀佛衆生、彼佛心光常照是人、攝護不捨。總不論照攝餘雜業行者。

【講義】「如前」とは。次上の文に、毫相の光明・毛孔の光明・相好の光明等を明〔か〕す。之を指して「如前」と云〔ふ〕。『觀念門記』下へ七右の科判に依るに、上來は總じて色光を釋(六八左)し、「又如」以下は、別して心光を釋すと云〔ふ〕。但し今の「一一偏照」の文を直ちに心光と取るに非〔ざ〕るべし。何んとなれば、「如前」と言〔ひ〕て、即ち上の色光を受〔け〕て釋するが故に、尚ほ是れ色光なり。然〔れ〕ども文段の起盡を判ずる時は、下文に屬せざるを得ず。故に記主、判じて心光を釋すと云〔ふ〕。正〔し〕くは「但有」以下を心光と爲すべし。學者、宜〔し〕く文の起盡を明らかに、其〔の〕意を得べし。

◎正釈の最後、終わりを示す(結示)

『觀無量壽經』第九觀は、仏身觀であり、觀仏三昧である。その中に觀仏成就の境地に達した人が見る様子を、「光明遍照」等と説いたのである。この文によって、廣く念佛三昧による三緣攝取のありさまを解釋し終わる。したがって、今、觀仏と區別して、念仏三昧と云う。(聖岡)『教相十八通』下へ十六へ

◎引用文の第三、『觀念法門』

「如前」について、『觀念法門』のこの文のすぐ前に、白毫相の光明・毛孔の光明・相好の光明等について説明されている。これを指して「如前」と云う。〔良忠〕『觀念法門私記』下へ七右の段落分けによると、この引用文の前の『觀念法門』の内容は、概して色光について解釋し、ここに引用されている「又如」以下は、特に心光について解釋しているとす。ただし、この「一一偏照」の文を直ちに心光と取っているのではあるまい。なぜなら、「如前」といって、前に述べている色光を受けて解釋しているから、この「身相等光」も色光である。しかし、この引用文の始めから終わりまで全部を判断する時は、「身相等光」は、後半の「如」以下の文に組み入れざるを得ない。したがって三祖良忠は、心光を解釋していると云う。正しくは「但有」以下を心光としなければいけない。学ぶ者は、文の始めから終わりまで全部を分析して、その趣旨を理解しなければいけない。

○「不論照攝」等とは。『觀念門見聞』下〈五左〉に云「はく」、「論とは（者）、曰なり（也）。謂く、經に雜行を照攝すと曰はず（不）。雜業とは（者）、雜行なり（也）」と。但し雜行を攝せずと云「ふ」と雖も、實には前三後一の四正行も、非本願の故に、照攝せず。然「る」に今は且く、疎遠の行を舉「げ」て雜業と云「ふ」のみ。《『鈔』三〈三九〉問答あり》

◎後に私釋。

【本文】私問曰、佛光明、唯照念佛者、不照餘行者、有何意乎。答曰、解有二義。一者親縁等三義、如文。二者本願義、（六九右）謂餘行非本願。故不照攝之。念佛是本願。故照攝之。故善導和尚六時禮讚云、彌陀身色如金山。相好光明照十方。唯有念佛蒙光攝。當知本願最爲強。已上。又所引文中、言自餘衆善雖名是善、若比念佛者、全非比校也者、意云、是約淨土門諸行、而所比論也。念佛は既二百一十億中、所選取妙行也。諸行は既二百一十億中、所選捨麤行也。故云全非比校也。又念佛（六九左）是本願行、諸行非本願。故云全非比校也。

◎宗祖の私見（私釈）

○「不論照攝」等について、「聖聰」『觀念法門私記見聞』下〈五丁左〉に、「論とは、曰である。つまり、經には雜行を修するものを照らし救い取るとは曰っていない。雜業とは、雜行のことである。」とある。但し雜行を修するものを救い取らないと云うが、實際には前三後一の四正行も、本願の行ではないので、照られもせず、救い取られもしない。けれども、ここではひとまず、疎遠の行を挙げて雜業と云うだけである。《『良忠』『決疑鈔』三〈三九丁〉に問答がある》<sup>54</sup>

【講義】「解有二義」とは。『鈔』に云「はく」、「二義と云「ふ」と雖「も」、水火の異に非「ず」。謂く、念佛は即「ち」是れ本願の行なるが故に、三縁の義を具す（也）」。

○禮讚の中に、「金山」とは、須彌山なり。但し須彌は、四寶所成なれども、北方は黄金なるが故に「金山」と云「ふ」。《『禮讚記』下〈三紙〉》『金光明經』に云「はく」、「佛身微妙にして、眞金色。其「の」光、普く照「ら」すこと、金山に等し」。

「解有二義」について、「良忠」『決疑鈔』に、「二つの意味とは云つても、水と火ほどの違いではない。すはわち、念仏は本願の行であるから、三縁の意味をそなえているのである」とある。<sup>55</sup>

○『往生礼讚』の引用文中に「金山」とは、黄金の山である。ただし須彌山は、「金・銀・瑠璃・水晶の」四宝から成り、北方は黄金であるから「金山」と云う。《『良忠』『往生礼讚私記』下〈三紙〉》『金光明最勝王經』には、「仏身は計り知れないほどすばらしく、純金の色であり、その光がくまなく照らすことは、須彌山に等しい」とある。<sup>57</sup>

○「照十方」等とは。「照十方」は、色光なり。「唯有」以下は、心光なり。

○「當知本願」等とは。本願とは、第十八を指す。非本願の最弱に對して、本願を最強と云ふ。念佛は本願の行なるが故に、名義不離にして、攝益あるなり。

○「約淨土門諸行」とは。往生の行に於〔ひ〕て、比校を論ずること、本文分明なり。然〔る〕に猶〔ほ〕此〔の〕釋あるは、愚蒙の徒、誤〔り〕て「全非比校」の文に就〔き〕て、餘經輕蔑の思ひを生ぜんことを恐るる故に、此〔の〕釋を爲すか（歟）。《『澤見』》

○「又念佛是本願」とは。問〔ふ〕。次上の選擇の義と、今の本願の義とは、是れ選擇本願の一義なるべし。何ぞ二義と爲すや。答〔ふ〕。選擇に由〔り〕て本願と爲すが故に。選擇と本願とは相ひ離れずと雖も、其〔の〕義分〔かち〕て二と爲す。例せば、本願と三（七〇右）縁と相ひ離れざれども、其〔の〕義異なるが故に、分〔かち〕て二義と爲すが如し。《『澤見』》《『上來第七章を解し竟る。』》

選擇本願念佛集講義卷中終

○「照十方」等について、「照十方」は、色光である。「唯有」以下は、心光である。

○「當知本願」等について、本願とは、第十八願を指す。本願でないことが最弱であることと對比して、本願を最強と云う。念佛は本願の行であるから、名前〔名〕である名号とその内容〔義〕である光明は離れることがないから、「念佛の行者には」救い取られる利益がある。

○「約淨土門諸行」について、往生の行の中で、比較を論じることが、引用文で明らかである。しかしなおこの解釈があるのは、愚かな人たちが、誤って「全非比校」の文について、他の經典に對して輕蔑の思ひを起こすことを恐れたので、この解釈をしたのではないか。《『持阿』》《『選択決疑抄見聞』》<sup>38)</sup>

○「又念佛是本願」について、【問】質問する。すぐ前に述べられている選び取られた行である（選択）という解釈と、この本願の行であるという解釈とは、選択本願という一つの解釈ではないか。どうして二つに分けて解釈をするのか。

【答】答える。選び取ることによつて本願となつたから、選択と本願とは離すことができないが、それを二つに分けて解釈する。例えば、本願と三縁は離すことは出来ないが、意味が異なるので、分けて二つの解釈をするのと同様である。

《『持阿』》《『選択決疑抄見聞』》《『以上第七章を解釈し終わる。』》

選択本願念佛集講義卷中終

註

(1) 良忠『観念法門私記』（『浄全』第四卷二六〇頁下）

(2) 聖聰『観念法門私記見聞』（『浄全』第四卷三〇〇頁上）

(3) 聖岡『伝通記釋鈔』（『浄全』第三卷八六九頁下）

- (4) 聖岡『決疑鈔直牒』（『浄全』第七卷五六〇頁上）
- (5) 尋・両手を広げた長さ。長さの単位。古代中国では八尺。日本では五尺、または六尺。ひろ
- (6) 第十二願・康僧鑑訳『無量寿経』「設我得佛光明有能限量下至不照百千億那由他諸佛國者不取正覺」（『浄全』第一卷七頁）
- (7) 『浄全』の訓読は、「諸佛の光明、能く及ばざ（不）る所なり」。（『浄全』第一卷一三頁）
- (8) 第三十三願・康僧鑑訳『無量寿経』「設我得佛十方無量不可思議諸佛世界衆生之類蒙我光明觸其身者身心柔軟超過天人若不爾者不取正覺」（『浄全』第一卷九頁）
- (9) 了慧『選択大綱抄』（『浄全』第八卷四二頁上）
- (10) 禮阿・然空（く一二九七）鎮西流一条派の祖。十三世紀末、浄土教の混乱していた京都に鎮西流を定着させ、発展への下地を作った人。禮阿、法光明院ともいう。
- (11) 相傳の義・良曉『決疑鈔見聞』（『浄全』第七卷四一頁下）および良栄『浄土宗要集（東宗要）見聞』（『浄全』第七卷四六四頁上）
- (12) 良忠『往生礼讃私記』卷上（『浄全』第四卷三八一頁上）「今の下の文に云く以光明名號攝化十方へ已上」光明とは（者）第十二の願を指す。名號とは第十八の願を指す・是の故に念佛は名義具足して定んで往生を得」
- (13) 良忠『選択伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷二五九頁下）
- (14) 鳩摩羅什訳『阿弥陀經』（『浄全』第一卷五三頁）
- (15) 十二光「無量壽佛號、無量光佛・無邊光佛・無礙光佛・無對光佛・徼王光佛・清淨光佛・歡喜光佛・智慧光佛・不斷光佛・難思光佛・無稱光佛・超日月光佛」・康僧鑑訳『無量寿経』（『浄全』第一卷一三頁）
- (16) 曇鸞『往生論註』（『浄全』第一卷二三八頁上）「稱彼如來名如彼如來光明智相如彼名義欲如實修行相應故」（『講義』は「如彼名義」の四字脱）

- (17) 「称名念仏していても、なおも無知でありつづけ、願いが一向にかなわないものがある」、という問いに対する答である。
- (18) 良忠『選択伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷二五九頁下）
- (19) 良忠『選択伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷二五八頁下）「徳大寺の唯蓮房、雲居寺に参籠して七日、攝取之義を祈請す。満夜の夢中の本尊手を申て行者の腕を握り、臂を動かして聲を出して云く。攝取是也。然して後に蓮華谷を詣て夢の虚實を問ふ。僧都、面に感涙の氣有て報て云く定ではれ實夢也と。云云」傳法院覺淵阿闍梨の説法の辭に云。攝取之義、祕法中より出たり。所謂掌の内に握つて（而）捨てざ（不）る、是を攝取と名く（云云）。蓮華谷の感涙、其意此に在るか（歟）。」
- (20) 良忠『観経疏伝通記（定善義）』（『浄全』第二卷三四九頁下）
- (21) 貞準『観経四帖疏新記』十六卷、天和二年（一六八二）刊
- (22) 『講義』本文にはここに引用符「」が挿入されている。
- (23) 牒文「でつもん」と読む。長い文章を段に区切ることに
- (24) 良忠『観経疏伝通記（定善義）』（『浄全』第二卷三五五頁上）
- (25) 聖岡『伝通記糅鈔』（『浄全』第三卷八八三頁下）
- (26) ある人・不明。直後の「ある人」も同人物と思われる。
- (27) 『観無量寿経釈』（『昭法全』一〇五頁。『浄全』第九卷三四一頁下の当該箇所にはこの記述は見当たらない。『昭法全』注参照）
- (28) 遠近は「遠」と「近」ではなく、直前の「多少」が「多い」ことを表すのと同様、「遠さ」を意味する。
- (29) 良忠『選択伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷二六〇頁下）
- (30) 『浄全』第二卷四九頁では「衆生憶念佛者」、「講義」は「者」字脱
- (31) 四縁・結果を生ずる直接条件としての因に対して間接条件である縁を四種に分類したもの（一）因縁（因としての縁。そのまま因となる縁。その因には六種＝六因を分ける）（二）等無間縁（前の利那の心のはたらきが次の利那の心のはたらきを生ずるための縁となつて、その間に他の心が入り込まないもの）（三）所縁縁（対象としての所縁



が心のはたらきを生ずるための縁となる場合をいう) (四) 増上縁  
(以上の三縁以外の間接的な条件をいう) の四つ。

- (32) 良忠『観経疏伝通記(玄義分)』(『浄全』第二卷一三二頁上)
- (33) 善導『観経疏玄義分』(『浄全』第二卷一二頁上)
- (34) 善導『観経疏序分義』(『浄全』第二卷二八頁上)
- (35) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷二六二頁下)
- (36) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷二六二頁上)。
- (37) 聖岡『伝通記釋鈔』(『浄全』第三卷八七八頁下)
- (38) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷二六二頁上)
- (39) 『観無量寿経釈』(『浄全』第九卷三三二頁、『昭法全』一二二頁)
- (40) 聖岡『決疑鈔直牒』(『浄全』第七卷五六一頁上)
- (41) 聖岡『伝通記釋鈔』(『浄全』第三卷八七八頁上)
- (42) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷二六二頁上)
- (43) 聖岡『伝通記釋鈔』(『浄全』第三卷八七八頁上)
- (44) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷二六四頁下)
- (45) 妙楽・湛然(七一―七八二)は中国・唐代の天台宗の僧侶。荆溪湛然と呼ばれ、また、妙楽大師と称された。天台宗の第六祖。
- (46) 『止観輔行伝弘決』『大正』四六卷一八二下
- (47) 第一九願・康僧鑑訳『無量寿経』「設我得佛十方衆生發菩提心修諸功德至心發願欲生我國臨壽終時假令不與大衆圍繞現其人前者不取正覺」(『浄全』第一卷八頁)
- (48) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷二六五頁上)
- (49) 聖岡『伝通記釋鈔』(『浄全』第三卷八八三頁上)
- (50) 聖岡『教相八通』(『浄全』第二卷七五八頁)
- (51) 六十二丁左の(五) 観称分別参照
- (52) 良忠『観念法門私記』(『浄全』第四卷二六〇頁)
- (53) 聖聰『観念法門私記見聞』(『浄全』第四卷三〇〇頁)
- (54) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷二六五頁下)

- (55) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷二六六頁上)
- (56) 良忠『往生礼讃私記』(『浄全』第四卷四〇一頁下)
- (57) 『金光明最勝王経』(『大正』一六卷四五四頁下)
- (58) 持阿『選択決疑鈔見聞』(『浄全』第七卷八一九頁下)
- (59) 持阿『選択決疑鈔見聞』(『浄全』第七卷八一九頁下)

【附記】平成十八年に、本庄良文研究員によって、この講義のテキストデータ化が提案された(本号、本庄良文氏稿「緒言」参照)。それより以前に、本庄氏からこの講義をその価値とともに紹介され画像データも入手していたので、躊躇なくデータ化プロジェクトに参加した。本稿「はじめに」の注にも記したとおり、協力諸氏の集中作業によりまたたくまに完了した。その後、本講義を二人で分担して現代語訳注を進めまいかと本庄氏から提案され、章別にそれぞれの分担を決めた。平成二十五年に佛教大学総合研究所の「法然仏教の多角的研究」プロジェクトが立ち上げられた。その中に、この講義の現代語訳注作業が組み入れられ、それまでの経緯から、私にその分担部分の作業を進めるようにという要請を本庄研究員からいただいた。その後、平成二十六年度「法然仏教学研究センター」発足に際し、そのメンバーとして参加することとなり、本稿に至った。申し訳なくも担当分の訳注作業すら滞らせていたにもかかわらず、この機会を与え、この『講義』との出会いをもたしてくださった本庄良文氏に、そして本研究センターのメンバーとして迎えてくださった関係諸氏に心より感謝し、その意をここに表す。

(うえの ただあき 嘱託研究員、浄願寺副住職)